

たまのよこやま

『今月の逸品 2021 年度 Returns!!』1

遺跡だより 港区 圓福寺跡遺跡3

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 動物遺存体（貝類）編④4

あの遺跡は今!? 北区 御殿前遺跡5

1/964 ～多摩ニュータウンの発掘調査を振り返る～ 多摩ニュータウン No.234 遺跡6

令和4年度企画展示「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔」へのご招待7

黄色いピンはすべて遺跡。

多摩丘陵と人の関わりを見てみよう。

令和4年度企画展示 3月19日公開

裏表紙をチェック!!

「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔」



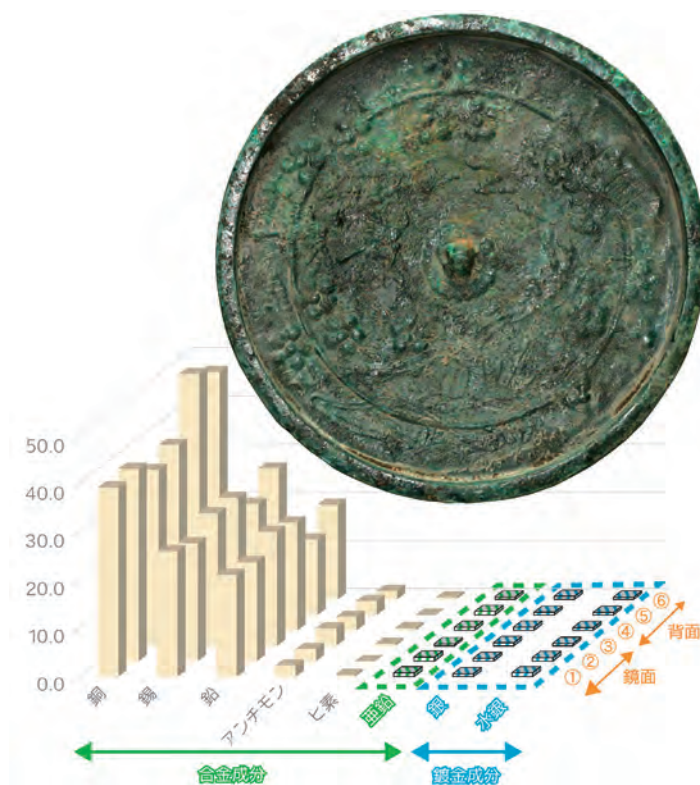
今月の逸品

2021年度
Returns!!

当センター体験コーナーの一角に設けている「今月の逸品」展示。コロナ禍にあった令和3年度も、選りすぐりの館蔵資料や現在調査中の速報など7例をご紹介しますことができました。このうち4つを取り上げて振り返ってみたいと思います。

Vol.75 「新たな光を湛えた鏡」

来る年は希望の光に満ちて欲しいとの願いを込めて令和3年のトップバッターに送り出したのは、鎌倉時代の居館跡（多摩ニュータウンNo.22 遺跡／多摩市）から出土した和鏡でした。しかし、その思いに立ちほだかったのがコロナ第3波。展示開始直前に臨時休館となり、展示がようやく日の目を見たのは既に初夏の陽射し眩い5月でした。令和2年度の企画展示「リケイ考古学」は終了していましたが、合金成分に当時稀少だった亜鉛が含まれ、全体に銀メッキが施されていたという新たな所見も併せてご紹介することができました。



Vol.76 「埋められた瓶子の謎」

その後は、令和3年度企画展示「現場のミカタ」にちなみ、出土状況が特徴的な資料を4回にわたって紹介しました。多摩ニュータウンNo.799 遺跡（八王子市）出土の古瀬戸瓶子（鎌倉時代）もその一つです。

やきものの壺や瓶子をそのまま埋める例は寺院建立の際の鎮壇^{ちんだん}など各地の遺跡に散見されますが、本例は底部を欠き、打ち割られた状態で埋められていたという日くつきの品。一体、誰が何のために？モノだけでも充分見ごたえのある逸品ですが、調査後三十余年を経て未だ解明されていない謎のベールをまとうことで、より一層魅力的に見えるのは私だけでしょうか。



Vol.80 「尼寺の墓に記された暗号」

11月は、東京文化財ウィーク2021とのタイアップ企画。ウィーク特別公開展示が都指定文化財・多摩ニュータウンNo.513 遺跡（大丸瓦窯）文字瓦を特集したことから、逸品展示でも瓦尾根瓦窯群（町田市）の文字瓦を取り上げました。

これらの資料は昭和40年代に国士舘大学



等によって発掘されたものですが、瓦窯跡群が多摩ニュータウンNo. 279 遺跡に含まれることから、10 年ほど前に当センターに移管されていたのです。一般向けに展示されたのは、おそらくこれが初めてだと思います。

奈良・平安時代に操業していた瓦尾根瓦窯群は、武蔵国内に所在していたにも関わらず相模国分尼寺に瓦を供給していたという謎多き窯です。表面にへう描き文字が多く認められることも特徴の一つなのですが、その内容がまた不可思議。武蔵国分寺造営に伴う瓦の場合は、多摩の“多”のように献納した郡・郷名の一文字を表すことが多いのに対し、“大”・“七”・“ナ”・“サ”など漢字や片仮名ともとれるような記号が多く描かれているのです。はてさて、この暗号が解読される日は来るのでしょうか。

看板娘として展示室入口に常設展示されているのですが、昨秋は江戸東京博物館にて開催された特別展「縄文 2021」出陳のため3 カ月ほど不在でした。昨年末に返却されたのを機に機器分析による再調査を行い、その結果を交えてご覧いただくというのがこの回の目論見だったのです。ところが、またしてもコロナに阻まれることになります。第6 波の急速な拡大に伴い、わずか7 日間で公開中断。まさに、“歴史は繰り返される”です。せめてこの紙上にて、概要をご紹介しますおきましょう。

まず、CT スキャンを用いた観察によって、脚部が単なる貼り付けではなく、胴部で包み込むように固定されたことが判明しました。自立させるための工夫だったのでしょうか。また、腰の辺りには種子の潜在圧痕らしき空隙が発見され、現在、詳細を解析中です。

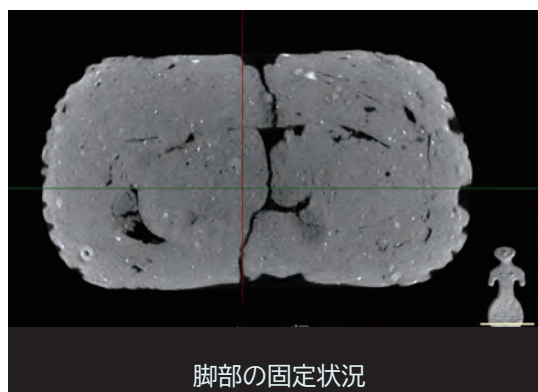
実体顕微鏡による観察では、頬の“刺青”表現などと同様の白色粘土による装飾が、胸の正中線などにも施されていたことが新たに判明しました。これらの知見も加えて作成したのが下図右側のCG 復元です。若かりし頃のヴィーナスの印象は如何？

令和4 年度も、様々な逸品をご紹介します予定です。どうぞ、ご期待ください。

(長佐古 真也)

Vol.82 「お帰り ヴィーナス」

明けて令和4 年の第1 弾として準備したのは多摩ニュータウンNo. 471 遺跡(稲城市)出土「多摩のヴィーナス」でした。この縄文時代中期の土偶は普段でも当センターの



脚部の固定状況



実際の土偶(一部復元) 3Dモデルを用いた復元図

圓福寺跡遺跡(港区遺跡番号212)は愛宕山の東麓に位置し、標高3～5mの地点に立地します。

圓福寺は、愛宕神社の別当寺として慶長8(1603)年に建立された新義真言宗の寺院です(第1図)。明治時代に廃仏毀釈の時流の下、廃寺となりました。

当センターによる発掘調査は令和2年12月から行われており、これまでに縄文時代～近代にかけての遺構や遺物が多数見つかっています。今回は、主に江戸時代の遺構を紹介します。

圓福寺に関連する遺構として、建物基礎に用いられた礎石、陶磁器や瓦が廃棄された土坑(ゴミ穴)、井戸、池などを検出しています。礎石の配置から複数回の建て替えがあったと推測され、整地土に焼土層が複数枚確認できたことから、複数回火災に遭っていたと考えられます。

幕末から明治時代初期に編纂された『諸宗作事図帳』(第174巻 新義真言宗)からは、圓福寺の建物配置、間取りの概要がわかります。境内の北側は愛宕神社への参道、南側には曹洞宗青松寺境内が隣接します。

今回の調査で検出した範囲は、この絵図や第1図に示した『江戸名所図会』によると玄関や使者の間といった建物入口にあたると考えられます(写真1)。17世紀～19世紀にかけての陶磁器類も出土

しており、圓福寺の変遷を理解する上で重要な資料になることが期待されます。

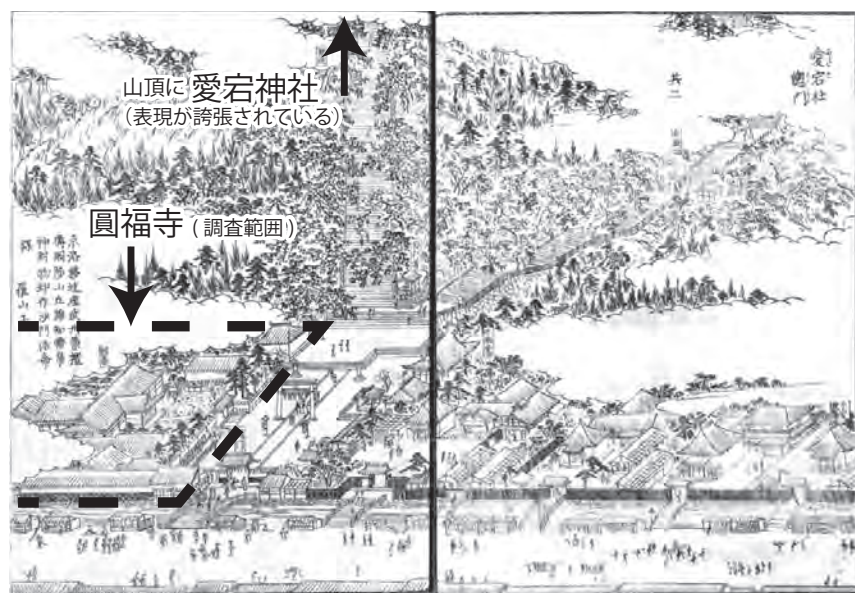
圓福寺を建築した際の整地土直下からは、「文明6(1474)年11月3日」と刻まれている板碑^{いたび}が出土しました(写真2)。15世紀後半の板碑は港区では珍しく、江戸時代以前の社会を考えるための貴重な資料です。また、板碑が出土した層からは、中世の陶磁器類が出土しており、圓福寺建立以前から継続した土地利用が行われていたことが伺われます。

今回の調査では、愛宕山東麓における土地利用の変遷を明らかにすることが大きな成果として期待されます。調査は今後も続きますので、続報をお待ちください。

(堀 恭介)



写真1 近世の礎石検出状況



第1図 圓福寺と愛宕神社絵図(出典:江戸名所図会 愛宕神社を加工)



写真2 15世紀末の板碑出土状況

かゆい所に手が届く

遺物の基本的な見方 動物遺存体（貝類）編④

一般的に、縄文人は春から夏には盛んに貝類を採っていたと言われています。そうした季節的な活動は「縄文カレンダー」としても有名ですね。しかし、どのようにして過去の人々が貝類を採集した季節が分かるのでしょうか？今回は、季節推定のカギを握る「貝殻成長線分析^{かいがらせいしやうせんぶんせき}」についてお話をします。

二枚貝は、貝殻の縁に新しい層を加えていくことで成長します。そのため多くの場合は、樹木の年輪のように「成長線」と呼ばれる線が日ごとに殻に残されます。季節の推定にとって特に重要なのは、貝の成長が遅くなる冬に、成長線の密度が濃い「冬輪」群が形成されるということです。最も成長線の密度の高い位置を海水温度の最も低くなる2月15日と仮定すると、その後の成長線の本数から、貝類の死亡日＝採集季節を算出することができるのです（図1）。

この方法^{※1}が1970年代に小池裕子氏によって日本考古学に紹介されて以降、縄文人が貝を採集した季節を調べる研究は蓄積されてきました。その結果、冒頭で触れた「縄文カレンダー」は実際にはそう単純ではないことが分かってきています。

貝塚の数が多い東京湾東岸では、こうした研究が盛んです。津川－村田川流域（千葉市域）の貝塚を対象にハマグリ^{といずみ}の採集季節を分析した樋泉岳二氏の研究^{※2}

によると、出土する貝の種類や推定される消費量は互いに似ているにも関わらず、その採集季節は矢作貝塚で春中心、木戸作貝塚で秋から冬中心、加曾利南貝塚で周年というように貝塚によって異なっていました。貝類以外の遺物にも注目してみると、矢作貝塚では春に浅場へやってくるマダイの出土量が多く、木戸作貝塚では石皿・磨石のような秋に採れる堅果類を加工する道具が多く、加曾利南貝塚では漁、猟、植物採集に使う道具がバランスよく出土しているという特徴があります。各生業^{せいぎやう}が盛んと思われる季節がハマグリの採集季節と一致することからは、遺跡間を人々が季節的に移動していることが推定され、例えば春は矢作貝塚に集まってマダイを採り、秋は木戸作貝塚に集まって堅果類を採集し、加曾利南貝塚は周年人の多い拠点的な位置にあると推定することができます。この場合ハマグリは、年間を通じて、季節的に居住する場所へ運ばれていたことになります。他にも、年によってアサリの採集季節が変動する愛知県伊川津貝塚^{いかわづ}のような例もあり、それはアサリを他の資源が欠乏した際の代替としていたためだろうと推定されています。

貝殻成長線分析は、貝類の採集季節を通して、当時の社会の様子を具体的に考えるための様々なヒントを与えてくれるのです。（宮本 由子）

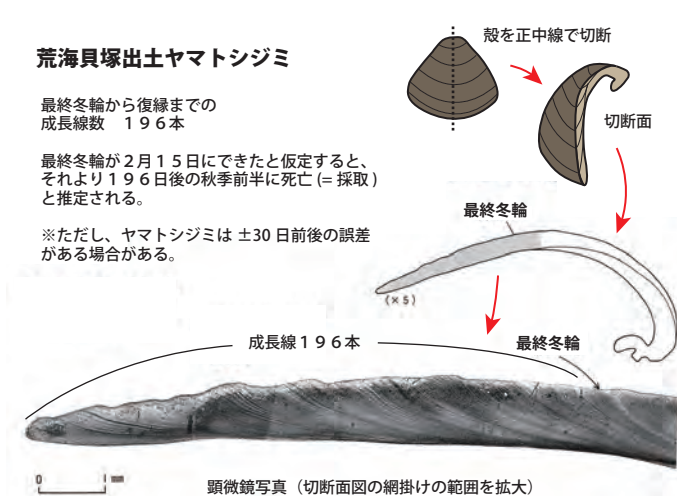


図1 顕微鏡で見る貝殻成長線^{※3}



図2 東京湾東岸の貝塚の位置^{※4}

※1 多くの日本人研究者は右の論文に示された方法を参考にしている。Koike, H. Daily growth lines of the clam, *Meretrix lusoria* — A basic study for the estimation of prehistoric seasonal gathering. *Journal of Anthropological Society of Nippon*, 81, 1973

※2 樋泉岳二 2013「動物資源利用からみた縄文後期における東京湾東岸の地域社会」『動物考古学』30号

※3 徳永園子 1996「縄文時代における貝類採集活動の季節の多様性と貝塚の衰退」『動物考古学』第7号の図版に加筆

※4 国土地理院の地理院タイル (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) から作成

参考：畑山智史 2018「貝殻成長線分析」『季刊考古学』第144号

いま あの遺跡は現在！？ Vol.20

— 西ヶ原研修合同庁舎 北区御殿前遺跡 —

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。

このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回ご紹介するのは、北区西ヶ原にある御殿前遺跡です。この遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡ですが、中でも著名なのが古代の豊島郡衙跡（古代の役所跡）で、こちらは北区指定史跡にもなっています。

当センターが発掘調査を行った地点は、JR 上中里駅の南側、平塚神社の西側にあたります。豊島郡衙跡に関連すると思われる古代の鍛冶工房跡が発見され、注目を集めました。工房跡からは、2基の炉跡に加え、2列に配置された鍛冶炉と鉄床石据付穴が複数確認されました。こうした状況から、この鍛冶工房跡は、官営工房のひとつで、同時に複数の鍛冶炉を操業する「連房式鍛冶工房」と考えられます。工房内から大量に出土した「鍛造剥片」や

「粒状滓」といった鉄滓は、ここで鉄素材から製品へ加工するための鍛錬鍛冶が行われたことを物語っています。工房跡から出土した土器は7世紀末のもので、この頃には操業を開始していたと思われます。これは、東日本で最も古い時期の連房式鍛冶工房跡の事例とされています。

線路脇にある「飛鳥の小径」を王子駅方面に歩くと、駅の手前で飛鳥山公園にたどり着きます。公園内にある飛鳥山博物館では、豊島郡衙跡に関する御殿前遺跡の出土品を見学することができます。飛鳥山は桜の名所としても有名な場所。春の日差しに誘われて、訪ねてみてはいかがでしょうか。（小西絵美）

◆調査成果が掲載された報告書

2017『御殿前遺跡』第2・3分冊 東京都埋蔵文化財センター調査報告第314集 東京都埋蔵文化財センター

写真1



写真2



写真1 左側が西ヶ原研修合同庁舎。庁舎敷地とJR線路の間には、上中里駅と王子駅を結ぶ「飛鳥の小径」が続いている。
写真2 白線部分が古代の鍛冶工房跡。左側に写るのがJR上中里駅。（元の画像に白線を加筆）

写真3



写真4



写真5



写真3 鍛冶炉と鉄床石据付穴の組み合わせが6組確認された。右の穴では、鉄床石が据え付られた状態で見つかった。
写真4 大量に出土した鍛造剥片。鍛造剥片は、鉄素材を加熱・鍛打した際に表面が剥離して周囲に飛び散ったもの。
写真5 調査地点の南側にある区立滝野川公園入口付近には、北区指定史跡「御殿前遺跡」の説明版が設置されている。

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。



#51 多摩ニュータウン No234 遺跡

多摩ニュータウン No.234 遺跡(以下、No.234 遺跡)は、1994年4月から9月にかけて1,900㎡の範囲を調査しました。今から28年前のことです。当時は多摩ニュータウン遺跡群の調査も終盤を迎えつつあり、1チーム3名体制で5つのチームが主に相原小山地区の調査に当たっていました。

調査の結果、縄文時代中期前半勝坂式の深鉢形土器上半部が出土した土坑1基と古代以降と思われる土坑1基および焼土1基が検出されました。

調査区の北側には、大栗川と境川の分水嶺となる丘陵頂部を中心に東西400m・南北300mの範囲に広がるエリアが多摩ニュータウン No.237・962 遺跡として調査され、縄文時代中期住居跡4棟、早期炉穴105基、陥し穴土坑158基などが検出されました。

No.234 遺跡は、こうした樹枝状に広がる尾根頂部に展開する活動痕跡群の南側谷部にありました。今では周囲一帯が区画整理事業によって風景が一変しており、すぐさまにはかつての調査位置を特定することも困難ですが、現在のミスターマックス町田多摩境ショッピングセンターが位置する辺りです。

こうした谷部から検出された縄文時代中期前半の土器上半部と土坑は、尾根頂部から検出された No.237・962 遺跡の縄文時代中期の住居跡から、水平距離で約100m、比高差で約20mを隔てています。谷部の斜面地にポツンと孤立して存在する土坑と、そこから赤化した破損礫や焼土粒と共に出土した、下半部が打ち欠かれたキャリパー形土器。非常に印象的でした。



縄文土器が出土した土坑

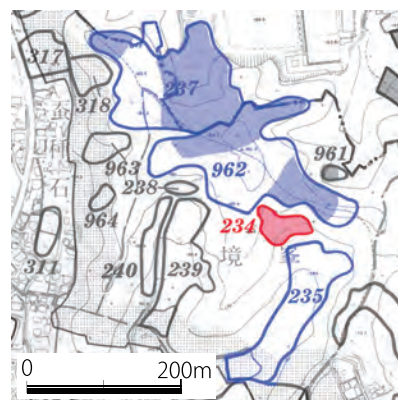
平坦面を有する台地や丘陵頂部ではなく谷部

や斜面地から住居跡を伴わずに土坑が孤立して存在するような在り方は、セトルメント・パターン(遺跡のタイポロジー)の「Dパターン」として知られてきました。それでは No.234 遺跡も、縄文時代中期前半の「Dパターン」なのでしょうか。

それを検討するためには、まず No.234 遺跡と No.237・962 遺跡あるいは No.234 遺跡の南東方向に広がる No.235 遺跡が区切れるのか、すなわち別の「遺跡」なのか、それとも一体とすべき同じ「遺跡」なのかといった問題を解決しなければなりません。そしてそのためにはそれぞれの時代あるいは時期のセトルメント・パターンとして操作可能とするために、各時代・時期ごとの分布状況を比較する必要があります。なぜなら、現在の「遺跡地図」は複数の異なる時代・時期の痕跡(遺構・遺物)を重ね合わせて表示された包蔵地「区分図」であるためです。すると問題は、「遺跡」を区切るとはいったいどのようなことなのか、果たして「遺跡」を数えることができるのかといった疑問にまでつながってきます。この文章のシリーズ・タイトルである「964」の意味にまで遡及する根源的な問題(遺跡問題)です。

行政的な「包蔵地」区分とは別に、考古学的に意味のある「遺跡」の区分を検討することで、この「遺跡」の立ち位置を明らかにすることが今後の研究課題です。

(五十嵐 彰)



東京都遺跡地図にみる No.234 遺跡周辺

(1996年 東京都教育委員会発行・一部加工)

濃い網掛け部は遺跡が残存しない範囲(当時)を、薄い網掛け部は多摩ニュータウン範囲の境界を示す。

「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔」へのご招待

東京都埋蔵文化財調査センターの令和4年度企画展示は「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔」というタイトルで開催します。

多摩丘陵に生きた人々のあり方を見ていくと、違う時代にどこか似たような現象がたびたび起きていることに気づきます。一つ例を挙げてみましょう。清水柳E式と呼ばれる縄文時代早期後葉と呼ばれる時代（約8,500年前）の土器があります。この土器はもともと静岡県東部あたりのものなのですが、その分布は境川に面する多摩丘陵西外縁を東限とし、それより先の遺跡からはほぼ見つかりません。まるで西から来た人々が丘陵を前にして突然歩みを止めてしまったかのような不思議な現象なのですが、面白いことに、多摩丘陵を「境」として遺物等の分布が途切れる現象は他の時代にも見られるのです。

このように、時代を超えて見られる現象を「境」「道」「恵」というキーワードを用いて整理することで、多摩丘陵の歴史の特質を考えようというのが今回の企画ですが、その前提として押さえておきたいのがこの地域の地形的特徴です。多摩丘陵の地形は東西にある武蔵野台地・相模野台地とわかりやすい対比を成しています（図1）。ほぼ一面に凹凸のない平坦な武蔵野・相模野に挟まれ、それらを隔てる多摩丘陵の丘や谷。丘陵の人々の暮らしは常にこの地形的条件を前提として展開してきました。では、このような多摩丘陵の地形はどのようにして形成されたのでしょうか？

関東地方の地下ではユーラシア・太平洋・フィリピン海プレートという3つのプレートがぶつかり合っているのですが、その結果として200万年前から「関東造盆地運動」という現象が起きています。これは東京湾など関東地方の中心に近い部分が少しずつ沈み込む一方で、周辺部分が盛り上がる現象で、沈みこんだ部分はすぐに土砂で埋まってしまうためなかなか地上からは実感できませんが、本来の高さより1,000m沈み込んでいるところもあるようです。

実は多摩丘陵を含む関東平野周辺の地域のほとんどは50万年ほど前には海の底にありました。少しずつ地上からの土砂がたまり、また気温の寒冷化によって海が引くことで徐々に陸地化していったのですが、造盆地運動において盛り上がる箇所にあたっている多摩丘陵は周囲よりも先に陸地化することになります。水中ではなだらかに土砂が堆積しますから、多摩丘陵も海から顔を出した直後は平坦だったのですが、陸地化すると雨や川が地面を削り、入り組んだ丘と谷が形成されます。武蔵野・相模野は多摩丘陵より陸地化するのが遅かったため平坦な面が広く残り、丘陵と台地という対照的な地形が形成されたのです（図2）。

このような地形的特徴は人々の暮らしにどのように影響を与え、また人々はそれをどう利用してきたのか。ぜひ3月19日から始まる企画展示に足を運んで確かめください！（舟木 太郎）



図1 多摩丘陵位置図

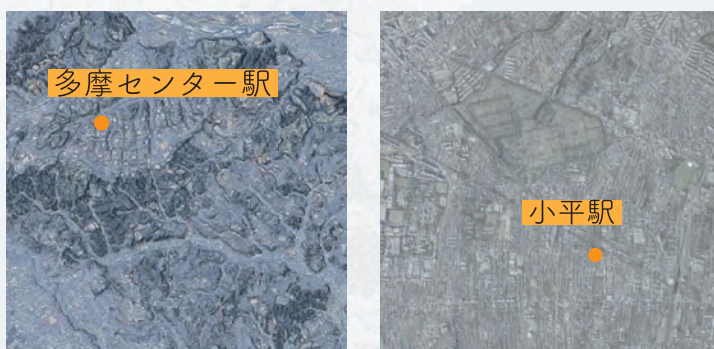


図2 多摩丘陵（多摩センター駅周辺）と武蔵野台地（小平駅周辺）の地形対比

多摩丘陵では河川流域以外に平坦な土地がほとんどないのに対し、武蔵野台地では起伏がほとんどない。

※今号の表紙：当センター2F入口にある多摩丘陵の遺跡地図模型。多摩ニュータウン開発以前の地形をご覧頂けます。



たまのよこやま 128

2022年3月31日発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296

<https://www.tef.or.jp/maibun/>